

熟年俳句誌

3 2013年  
月 号

# かたね

33



# 黒羽集

(十五)

佐藤喜仙

植木屋の店頭の紅葉ことさらに

早曉の白菊二輪冴えぐくと

大川の土手に冬萌二三本

藪巻をされて孤独の松となり

冬深し松の緑もくすみけり



針落つる音も響くや実南天

読書灯の消しがたき夜や霜の声

遠嶺や冬の大气のただ透ける

ハチ公に挨拶し街へクリスマス

年の瀬や吊革握れば温みあり

歳晩や急きてひびける槌の音

撒き米にパラパラ落つる寒雀

# かせね集

## 白選句集



### 「去年今年」

松本周二

冬耕を終え平らなる地に落暉

つつつと落ち葉の走り年惜しむ

作りみるメビウスの輪や去年今年

初御空尾翼のしるし識別す

トラツクの旗靡かせて初荷かな

人日や樹上の川鶉睥睨す

### 「松本城」

古川千鶴

銀嶺の屏風仕立てや松本城

鴨の陣くづれ水輪の八方へ

御手洗の杓の青竹淑気かな

神鶏の赤き鶏冠初社

初泣きの赤子を母の手に返す

鶴の舞ふ塗り椀の湯気雑煮かな

## 「拍子木」

川井素山

九條ねぎ洗ふ娘の白き息  
曲屋の残る枯野や南部唄  
漁火のだんだん増ゆる冬の宿  
亡妻と語る初夢淡く消ゆ  
着崩れを直す親子や初詣  
寒の入り二廻り目の拍子木の音

## 「春の雪」

安藤虎醉

白無垢と見たてし松の春の雪  
満目蕭条名ばかりの春立ちにけり  
春めくや風に誘はれ旅心  
森の木の素肌になりて春待てり  
花衣百人に百の色柄よ  
花は地に鳥は古巢に戻りけり

## 「雛」

菅原 孟

勝浦市雛が余生を送る街  
階はすべて雛が占むる街  
梅の花揺れて見送る電車かな  
二三本川の辺の黄水仙  
雪解水集めて早し梓川  
めばる漁漁師の告ぐる海の色

## 「初茜」

田島昭久

目の前の蕾ふくらむ初御空  
しきたりは長き列なす初詣  
山茶花の一ひら家に吹き込めよ  
雨戸あけ清しき日差し初茜  
冬將軍今年は頑と居据れり  
存在を求め門出る初句会

# 撫子集

## 主宰選



米田文彦

寒風や黒光りせる百度石

化粧せる爪解きほどく初みくじ

ビル街に翁の舞ひの初神楽

後ろより高き拍手初参り

そつと開け笑みて寄り来る初みくじ

新所帯買物籠に薺かな

蘿蔔と聞きて出自を問ひ直す

墨痕の色紙はみだす初硯

文机に墨の香立ちて淑気満つ

消防団の半纏も居てどんど焼

小池清司

長久保郁子

凍滝や光ひとすじあびて立つ

四半分の冬至南瓜を炊きにけり

健康をキーポイントに年新た

新聞を切りぬく音や冬ごもり

連句集読み継ぐ夜の膝毛布

秋彼岸過ぎ蟬のこゑはたと止み

川波に日の斑踊れる下り梁

冬ざれの湯の街匂ふ硫黄かな

川の辺の露天の出湯の雪深し

冬ぬくし靄にけぶれる街灯

小林美登里

通過する急行の風師走かな

岡野安雅

当選に万歳三唱冬ぬくし

ルミナリエ音と光で絆でき

寒風の顔痛く刺す改札口

初雪や選挙演説遠くあり

雪舞ひて墨絵のごとき木立かな

山本達人

雪道に足をとられて老いを見る

冬ざれの野の色薄く山水画

木守柿点晴とせる古都の里

初雪やキラキラキラリ心澄む

水仙の香りに書齋引き締まる

青木英林

雪見舟人情熱い出羽の国

早暁の奥深き杜淑気満つ

寒月のゴンドラの様空に浮く

雲間より神々しきや初日の出



# 那須野集

## 主宰選



餅一つ妻に減らされ老の春

後藤克彦

元朝の冷氣肌刺し四股を踏む

丸山酔宵子

振舞ひの酒待つ列の淑気かな

伊勢海老の鬚が折れてもめでたかり

霜除の敷藁に虫入りにけり

初風に箱根路登る選手悶ゆ

湯に浸り見ゆる川岸雪化粧

暖炉燃えオンザロックのモルトかな

鎌倉や山越えに見ゆる初日の出

神棚の榊の水替へ淑気満つ

新春や箱根の山は静かなり

柳田皓一

飯田線始発電車の霜固し

池内とほる

枯原についばむ二羽の初雀

裏山のふわふわ沈む落葉かな

不揃ひの林檎ひと山道の駅

新春や山の上から白き富士

チェーンを手に途方にくれぬ雪の道

垂直に枯葉たるるや栗林

天狼の咽ぶが如く虎落笛

短日や出掛くる昼も電気つけ

森岡陽子

山茶花に鳴き移りをる雀かな

田中清秀

年神を迎ふる膳の洋風に

朝日うけ冬芽湛ふる細き枝

さくさくと冬木の根元の霜柱

短日や公園の児童声高し

梅の木の残る葉の間に冬芽つけ

お年玉用意の爺も恵比須顔

春着きて母の化粧も濃くなれり

早朝の俄作りの雪だるま

通勤のみな小走りや冬の朝

橋本修平

青い空流るる雲の淑気かな

吉田博行

寒太郎吹きしか朝の虎落笛

冬木立小鳥集ひて憩ふかな

すぐ開ける孫仕舞ふ孫お年玉

元旦の最初の客は小鳥二羽

じじばばをゲームに誘ひ初笑

初日の出向かひの屋根に昇るかな

初刷の昨日の続き今日も読む

かるた取り孫に負けじと気合入れ

山茶花の落花流るる小川かな

和田勝信

粕汁のくもり眼鏡に妻朧

菊地崇之

銀屏背に紅葉の一枝生けてあり

行く年や十大ニュース語られて

山茶花の花弁に残る雫かな

焦げて良し堅くもうまき焚火芋

短日や小銭乗せたる石地蔵

湯豆腐にお酒はうまし腹温む

竹林に紅葉一本混ざりけり

短日や稽古帰りの暗き道

# 撫子集・那須野集鑑賞十二月号より

客員 村上克哉

## 撫子集

立冬や倉庫の壁のひび模様

米田文彦

立冬はこれより冬に入る初めの節で二十四節氣の一つ、陽曆の十一月八日ごろ。秋から冬への移行時期は見定めにくく、日射しも弱く日暮れも早くなり朝の冷気に身のひきしまることがある。小樽や札幌の埠頭の古い倉庫だろうか、長い歴史を刻んだ壁のひびが目詰めされ、白い接着剤の曲線模様の緊張感が冬をこれから迎える身の引き締まる思いを表現している。

秋晴れや航跡多き東京湾

本郷宗祥

「東京湾は東西20km、南北50km浦賀水道によって太平洋に通ずる。横浜、東京、横須賀など日本の表玄関、国際貿易港、軍港の他三崎、勝浦などの漁港

も多く、京浜、京葉工業地帯が広がり、大型客船、タンカー、フェリー、ヨット、漁船など数多い船が行き交う。秋空が青く澄み高くと晴れ渡り人々を駆り立てる秋晴れの日、観音崎か富津岬から浦賀水道の航跡を眺めていると爽やかな秋を実感する。

出番待つ張子の蛇に小春風

小池清司

平成二十五年の干支は蛇、癸巳、五黄土星の年である。はりぬきか、はり重ねで作った張子の蛇が干支の縁起物としてお店に並んで出番を待っている。立冬を過ぎて日毎寒さが募ってくるなか、良く晴れた日和の穏やかな歳末風景が目に見えぬ。

大根干す筵捲れる夕間暮れ

岡野安雅

洗い上げた大根を四五本ずつ架木などに懸けて、しんなりするまで天日に干す、また十本くらいずつ荒縄で括り大根の簾をつくって軒に吊るすこともある。大根を薄く切って干したものが切干しで千切りにして筵や竹管の上に干す。筵が捲かれていた薄暗い夕方の景であるから切干しであろうか、山間の農家の冬支度が目に浮かぶ。(以下略)

## 伝言板

申込 喜仙宛3月20日まで

(FAX又はTEL)

### 1 第十五回本部句会(原則第二金曜日)

①日時 2013年3月8日(金)

14:00~17:00

②場所 目黒区「下目黒住区センター」

3階会議室

③投句 当季雑詠 5句

④会費 1000円

### 2 第十六回本部句会

①日時 2013年4月8日(金)

14:00~17:00

その他事項は第十五回と同じ

### 3 第十五回吟行 (原則第四火曜日)

日時 2013年3月26日(火)

場所 目黒川沿いお花見

集合 JR目黒駅改札出たところ 11時

昼食 各自用意(お花見弁当を楽しもう。但しビールは缶一本、酒は一合まで)

句会場 中目黒住区センター会議室

出句数 囀目3句

費用 交通費・昼食代各自負担

### 4 第十六回吟行

日時 2013年4月23日(火)

場所 芭蕉の道・芭蕉記念館庭園

集合 都営「大江戸線」森下駅

改札出たところ 11時30分

昼食 「みや古」推奨「深川めしセット」

1500円

句会場 芭蕉記念館会議室

出句数 囀目3句

費用 交通費・昼食代各自負担、句会場費均等割り

詳細は次号にて

### 5 「かさね」友の会の皆さん

投句をされる時、裏面に「友の会の声」欄がございますので、句評、近況報告、ご意見などご自由にお寄せください。

なお友の会の皆さんは特別作品(十句)、随筆、その他論文等をいつでも投稿することができます。お待ちいたしております。

## 会員募集

何時からでも「かさねの友」になれます。

年会費 12000円(前納)

ただし年次途中入会者は入会申し出の翌月より

12月まで月割りで納付

見本誌 400円(切手可)

見本誌請求先

15210033

東京都目黒区大岡山2-17-5

かさね俳句会 佐藤喜仙

# 「かさね」俳句の基本

## I 前提

- 一、俳句は世界最短の「詩」である。
- 二、有季・定型・文語体を旨とする。

### ① 「詩」とは

水原秋櫻子が俳誌「馬酔木」の昭和六年（一九三一年）十月号に載せた「自然の真と芸術上の真」より抜粋

「ただ自然の真だけを追求したところで詩人たる資格はない。心を養い、主観を通して見たものこそ文芸上の真で、これを尊ぶ人が詩人である」

### ② 有季の原則

#### 原則①

「季語とは累々と先達が磨いてきた季節を表す言語群であり、歳時記により集大成されている」

#### 原則②

「季語が一句の中で使われ、その句の季節を明確に表出する時、その季語を「表季語」と称する」

#### 原則③

「一年を通して存在する現象、あるいは事物が季を定められている語彙の場合、その定められた以外の季節においてはその語彙は季語とは見做さない」

#### 原則④

「季重なりとは同季に属する季語を一句の中で二語以上重ねて使用する場合をいう」

#### 原則⑤

「例えば絵・版画・掛け軸・屏風・襖絵等に描かれた、通常季語と見做される花鳥等は、季感がないので季語とはみなさない。同様比喩に使われている通常は季語である語群もやはり季感が無きがゆえに、季語とはみなさない」

### ③

## 文語体について

俳句は韻文であることを守るため文語を使用し、用言においては歴史的仮名遣いを必ず使用することとする。

## II

### 俳句の約束事

一、切れ字（十八字）を使い俳句にメリハリをつける。

現在切れ字とされている文字は、や、かな、けり、もがな、し、ぞ、か、よ、せ、れ、つ、ぬ、へ、す、いかに、じ、け、けん。

二、表現

主観を直接表現せず、具象表現を使うことにより、自分がその一句の中で言いたい主観を暗示の形で言い表す。

三、地名・固有名詞

地名・固有名詞は一句の中にあつて季語に次ぐ重要な働きをするが、一句の中で使用する時は少なくとも大方の俳人が知っているであろう地名・固有名詞にとどめる。

四、三段切

形は三段切でも言わんとする内容が繋がって居れば良しとする。

例 完全な三段切 奈良七重七堂伽藍八重桜 芭蕉

三段切でも可 初蝶来何色と問ふ黄と答ふ 虚子

五、前書・ルビ

前書は慶弔の句にのみゆるされる。

ルビは誌中では使用しない。

## III

### 俳句の作り方……山口誓子

私の俳句の作り方を、図式で現せば、至極簡単である。感動が先立たねばならぬ。事物と出会って思わず「ああ」と叫ぶその叫びから、俳句は生まれるのである。